

## ナシ輪紋病の果実感染時期とその防除

野口保弘・山下幸雄 (福岡県農業総合試験場)

NOGUCHI, Y. and Y. YAMASHITA : Infection Period and Control of Physalospora Canker on Japanese Pear Fruit

ナシ輪紋病の果実感染生態を明らかにするため感染時期の検討を体系的防除試験を行った。その概要を報告する。

### 1. 試験方法

1) 果実の感染時期を調べるため発生圃の幸水 (約10年生) を供し、満開約1ヵ月後の5月中旬に防菌袋をかけ、ほぼ一定期間除袋し、収穫期及び収穫後における発病状況を比較。1977年から4ヵ年間同一ほ場で行った。

2) 有効な薬剤と体系防除の効果を調べるために、同一ほ場の幸水を供し、1977年から5ヵ年間単剤での防除効果、組合せによる体系防除の効果比較試験を行った。調査は、収穫期の樹上及び収穫後の2回行った。

### 2. 結果及び考察

1) 除袋期間中の感染による果実の発病率で比べると次のようである。1977年は5月中旬から感染がみられ、6月下旬に高くなった。1978年は少発生のため判然としなかった。1979年は6月中下旬除袋以降から発病がみられ、6月下旬～7月上旬に発病率が高くなった。1980年は5月下旬～6月上旬除袋以降から発病が認められ、7月上旬～8月上旬に発病率が高くなった。以上のことから幸水では5月中旬から感染し、6月中下旬以後降雨が多いと感染率が高くなった。

2) 1977年はダイホルタン水和剤1,000倍とベンレート水和剤1,500剤とを比べたがダイホルタン1,000倍、ベンレート1,500倍いずれも防除効果は認められるが、ベンレート1,500倍は不十分であった。1978年は発病なく判然としなかった。1979年はダイホルタン1,000倍連用区とベンレート1,000倍-ダイホルタン1,000倍体系区、ベンレート1,000倍連用区とを比べた結果、ベンレート1,000倍連用区は無散布区に近い発病を見、ベンレート-ダイホルタン体系区も10%以上の発病を見、効果は不十分であった。ダイホルタン1,000倍連用区は防除効果が高かった。1980年も前年とほぼ同様で、ベンレート-ダイホルタンの体系防除の効果は不十分であった。1981年はキャブレート-ダイホルタン体系区、オーソサイド-ダイホルタン体系区を設け、

第1表 ナシ輪紋病の発生と除袋時期との関係 (1977)

除袋期間	発病率率 (%)	降水量 (mm)	降水日数 (1mm以上)
5.10-19	10.0	38.3	3
5.20-30	3.3	122.6	6
5.31-6.10	23.3	126.6	4
6.11-20	16.7	167.5	5
6.21-30	50.0	137.0	5
7.1-10	16.7	37.4	2
全期間無袋	90.0	731.6	32

ダイホルタン単剤連用区と比べた結果、オーソサイド-ダイホルタン体系区はダイホルタン単剤連用区にほぼ近い効果がみられた。ダイホルタン剤を規制の範囲内で使い、他剤との体系防除では、オーソサイドとの体系防除が効果的であった。

第2表 ナシ輪紋病に対する薬剤の防除効果 (1977)

試験区別	樹上果発病率 (%)	収穫果発病率 (%)
ダイホルタン区	2.0	10.0
ベンレート区	8.0	30.0
無散布区	36.7	90.0

第3表 ナシ輪紋病に対する体系防除試験区の構成 (1979)

試験区別	散布月日					
	5.10	5.25	6.4	6.14	6.24	7.4
ダイホルタン区	D	D	D	D	D	D
ベンレート-ダイホルタン体系区	B	B	D	D	D	D
ベンレート区	B	B	B	B	B	B
無散布区	—	—	—	—	—	—

注) D: ダイホルタン1,000倍 B: ベンレート1,000倍

第4表 ナシ輪紋病に対する体系防除の効果 (1979)

試験区別	樹上果発病率 (%)	収穫果発病率 (%)
ダイホルタン区	2.0	10.0
ベンレート-ダイホルタン体系区	6.0	23.3
ベンレート区	26.0	40.0
無散布区	26.7	50.0

注) 調査果数: 樹上果100果、無散布区30果、収穫果30果

第5表 ナシ輪紋病に対する体系防除試験区の構成 (1981)

試験区別	散布月日						
	3.20	5.16	5.23	6.4	7.2	7.11	7.18
キャブレート-ダイホルタン体系区	PCP+LS	K	K	K	D	D	D
オーソサイド-ダイホルタン体系区	—	O	O	O	D	D	D
ダイホルタン区	—	D	D	D	D	D	D

注) K: キャブレート O: オーソサイド D: ダイホルタン

第6表 ナシ輪紋病に対する体系防除の効果 (1981)

試験区別	樹上果発病率 (%)	収穫果発病率 (%)
キャブレート-ダイホルタン体系区	2.0	23.3
オーソサイド-ダイホルタン体系区	3.0	3.3
ダイホルタン区	0.0	0.0

注) 調査果数: 樹上果100果、収穫果30果